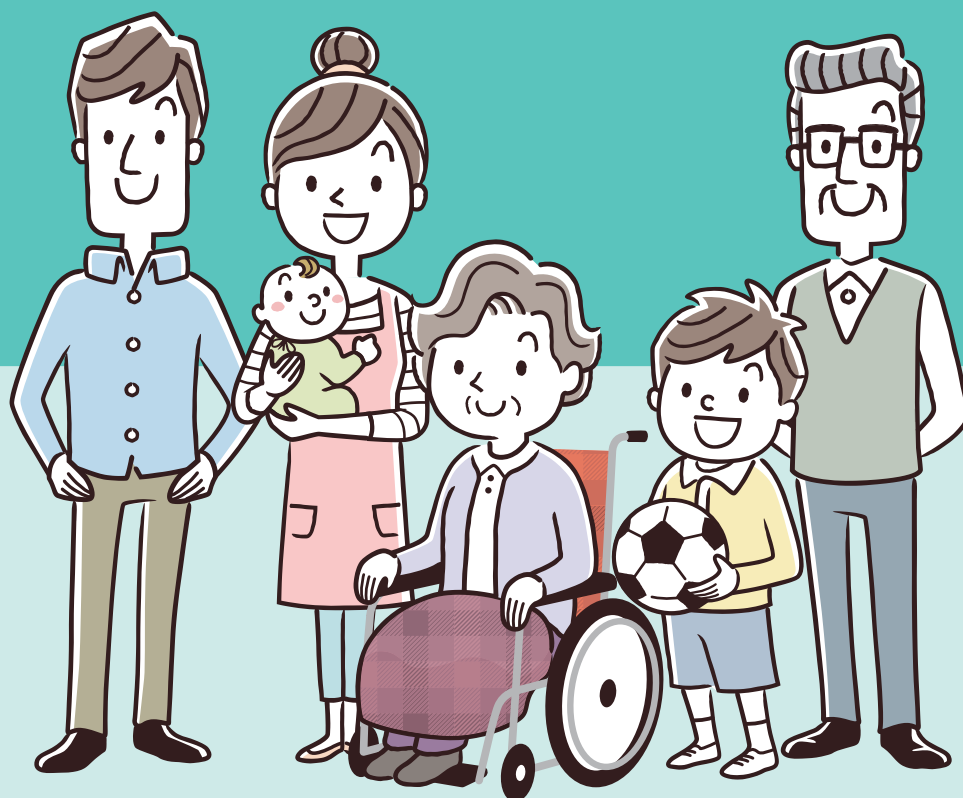


介護のしごとと 出張授業 マニュアル

実施主体：朝日新聞社・厚生労働省補助事業
令和7年度 介護のしごとと魅力発信等事業（情報発信事業）



目的



本マニュアルは、介護職の方が小学生（主に高学年向け）、中学生、高校生を対象に「介護の仕事」について出張授業を行う際のガイドです。「介護＝特別な専門職」という前に、“人を大切にする文化を育てること”を伝えることがまずは重要です。

出前授業は、単に職業紹介をする場ではなく、出張授業の経験が少ない方でも、**授業の企画、プログラム構成、準備、実施、授業後のフォロー**まで一人で対応できるよう、ポイントをまとめています。

INDEX

目的	2
01 授業の目的と到達目標	3
02 授業の設計と運用	4
2-1 授業の流れと時間配分	4
2-2 導入の展開例	5
2-3 本編の展開例	7
03 まとめ（授業の終わり）の展開例	11
04 具体的なアクティビティ案（ワーク・クイズ・体験など）	13
4-1 小学生向けアクティビティ	13
4-2 中学生向けアクティビティ	14
4-3 高校生向けアクティビティ	15
05 使用する教材・資料	17
06 講師の話し方や表現の工夫	19
07 授業後のフォロー	21
08 印象に残るメッセージ	24
本プロジェクト概要と協力団体	26

01

授業の目的と到達目標

出 前授業の目的は、子どもたちに介護の仕事を“自分ごと”として感じてもらい、「人の力になるって、ちょっといいかも」という気持ちを育むことです。そして授業を通じて、児童・生徒たちに介護の仕事への理解と関心を高めてもらい、将来的な行

動意欲につなげることが目的です。

学年によって関心のポイントや理解の深さが異なるため、年代別の到達目標を設定して授業をデザインします。

以下は学年別の目標例です。



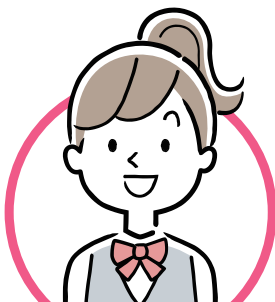
小学校高学年向け

- 介護は「困っている人を助けて“ありがとう”と言ってもらえる仕事」とであると知る。
- 身近なおじいちゃん・おばあちゃんを助けることにつながる優しさや思いやりの心を育む。
- 「誰かの役に立てるってうれしい」という気持ちを育み、将来の小さな興味の芽をつくる。
- 「特別な人だけができる仕事ではなく、日ごろの思いやりが社会を支える力になる」ことを実感する。

- 介護は、「人の幸福を支える社会的に意義のある仕事」であることを介護の現場で働く人々の映像などを通して認識する。
- 介護職＝ただの力仕事ではなく、高齢者や障害者の生活を支えコミュニケーションを通じて幸せを支える専門職であることを理解することで、自分の職業観を広げる。
- 将来の職業選択肢の一つとして介護分野を検討するきっかけを作る。
- 介護は「人の暮らしに寄り添うクリエイティブな仕事」であることを動画などを通して捉え、自己効力感の涵養を目指す。



中学生向け



高校生向け

- 「大変そう」というイメージを、リアルな魅力ややりがいとともに捉え直す。
- 介護が社会的に必要不可欠な仕事であること、そして介護職が担う“誇り”や“技術”を知る。
- 福祉系の大学・専門学校、資格取得のルートなど、介護職の実態を捉えることを通して、進路の具体的道筋を捉える。
- 介護職の価値である「誰かの人生の支えになれる」ということを実際の現場にたつ人々の声から捉えることで、将来の職業選択の一つとして可能性を検討することができる。

各学年でゴールは異なりますが、共通して「人を支えることの素晴らしさ」を実感させることが重要です。

02

授業の設計と運用



2-1 授業の流れと時間配分 (仮に50分枠の場合)

学校の授業時間(1コマ)は**45~50分程度**が想定されます。以下は**50分間の授業構成例**です。導入・本編・まとめの3パートに分け、メリハリをつけたプログラムにします。

パート	内容	時間配分(例)	ポイント
導入	あいさつ、自己紹介、授業の目的提示、アイスブレイク(質問やクイズで関心を喚起)	5分	最初に関心を引く。簡単な問いかけや挙手アンケートで参加意識を高める。 場の空気をあたためる“安心の雰囲気づくり”を最優先に。介護の話は、人とのつながりがテーマなので、講師自身が笑顔でいることがメッセージになります。
本編	講義(介護の仕事紹介、エピソード紹介)、体験・ワーク(クイズ、グループ討議、技術体験など)	35分	講義と参加型プログラムを組み合わせる。一方的な話にならないよう適宜児童・生徒に考えさせる場を作る。 介護の技術だけでなく、“その技術がどんな想いから生まれているか”を伝えると、ぐっと“自分ごと”化します。
まとめ	内容の振り返り、キーメッセージの強調、児童・生徒への問いかけ(感想や気づき)、お礼	5分	学んだことを整理し重要なメッセージを心に刻む。児童・生徒自身の言葉で感想を共有させると定着が高まる。 最後のひと言は「介護の話＝未来の自分の話」に接続するメッセージで締めると、心に残りやすいです。
質疑応答	質問受付、補足説明	5分	中高生の場合、質問を受け付ける時間を設ける。難しい質問は正直に答え、分からなければ後日回答でもOK。 “わからないことをそのままにしない姿勢”自体が、介護の仕事で大事な価値観として伝わります。

※時間配分は目安です。小学生は集中力が続きにくいいため**短いアクティビティを複数回入れる**など工夫し、本編の講義パートをやや短めに設定します。中高生は内容を深めるディスカッションやQ&Aにもう少し時間を割いても良いでしょう。また学校の時間割に合わせ、45分しか取れない場合は体験活動をコンパクトにするなど調整してください。

2-2 導入（授業の始め）の展開例

導入は、児童・生徒の興味を引きつけ、授業の方向性を示す大切なパートです。明るく元気な挨拶で始め、自己紹介では**介護職としての自己経験**を簡単に話しましょう。「〇〇介護施設で介護福祉士をしている△△です。今日はみなさんに介護の仕事のことを知ってもらいたくて来ました。」など、**なぜ出張授業に来たのかも**伝えられると良いです。

アイスブレイク・問いかけの例

小学生向け

「皆さんは家でおじいちゃんやおばあちゃんと一緒に暮らしていますか?」「最近お年寄りのお手伝いをしたことはありませんか?」など身近な質問から始めると、自分ごととして捉えやすくなります。

挙手や簡単な発言を促し、雰囲気を和らげましょう。子どもたちの“やったこと・感じたこと”に必ずリアクションを返すと、勇気づけの場になります。介護の本質は「相手を認めること」。ここでも実践してみせると、自然と学びになります。

中学生向け

「“介護”と聞くとどんなイメージがありますか?」と問いかけてみます。

ネガティブ・ポジティブ両方の意見を板書しながら受け止め「今日はそのイメージが少し変わるかもしれません」と興味を引きます。中学生は“本音”で話したい時期。否定せず「そう思ってくれてありがとう」と返すことで、対話が深まります。介護は“本音で向き合う”仕事だと伝える絶好のチャンスです。（*参考：事後アンケートでは「介護＝大変」が「楽しく・やりがいのある仕事」へと印象が変化した生徒もいました。）

高校生向け

社会課題に絡めたデータやキーワードを投げかけます。

「日本は超高齢社会と聞いたことがありますか?介護の仕事って将来なくなると思いませんか?」など、考えさせる問いで関心を喚起します。

例えば「介護って何をイメージしますか?」と問いかけると効果的です。それぞれ介護のイメージが異なることを明確化していきます。高校生には“答えのない問い”を投げると、自分で考えるモードが生まれます。介護はまさに“答えのない仕事”。だからこそ人間らしさが出る、と伝える導入の布石になります。



ミニクイズの例

イントロダクションとして簡単なクイズを出すのも◎です。例えば以下のように問いかけます。

- 「65歳以上の高齢者は日本に何人くらいいるでしょう？」
- 「介護の仕事をしている人は全国で何万人くらいいるでしょう？」
- 「介護を利用している高齢者はどれくらいの割合いると思う？」等

(選択肢を3つくらい提示すると参加しやすくなります)

クイズの選択肢に“ちょっとびっくりする数値”や“意外と少ない選択肢”を混ぜておくと、感情

が動き、記憶に残りやすくなります。

クイズは児童・生徒の興味を引くだけでなく、**これから伝える内容への伏線**にもなります。正解は講義パートで触れる予定があれば、ここでは「答えはこの後の話で出てきますよ」と引っ張ってOKです。



授業の目的共有

導入の最後に「今日は〇〇について一緒に考えましょう」「介護の仕事の魅力を知ってもらえればと思います」など、授業の目的やゴールを簡潔に伝えます。

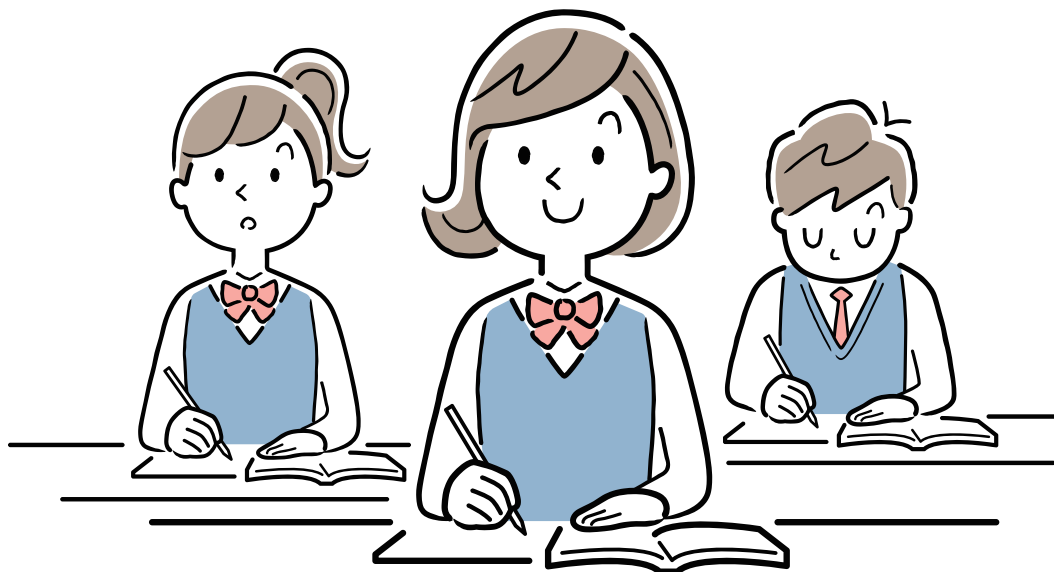
参加児童・生徒の学年なりの関心に合わせて目的を伝えてください。

- 小学生の例：優しい感じで「おじいちゃんおばあ

ちゃんを助けるお仕事のお話です」

- 中高生の例：「みなさんの将来の仕事選びのヒントにもなる話です」など

目的は“伝える”より“共に考える”言い方が効果的です。例：「今日はみんなと一緒に“人を支えるってなんだろう？”を考えにきました。」思考の扉が開きます。



2-3 本編（メインプログラム）の展開例

本編では、介護の仕事に関する具体的なお話と、児童・生徒が参加できる活動を組み合わせます。講義パート（座学）と参加型パートを交互に織り交ぜると効果的です。“聞く・考える・やってみる”を繰り返す構成で、介護の本質である「人とのつながり」を体験として残すことを意識します。

以下は展開例です。

1 介護の仕事とは？（講義）

スライドや画像を使い、まず**介護とは何か**を分かりやすく説明します。専門用語は避け、「困っている人の日常生活をお手伝いする仕事」「お年寄りが笑顔で暮らせるよう支える仕事」等、**シンプルでポジティブな表現**を心がけます。介護の仕事＝できないことを“してあげる”仕事ではなく、その人

が“その人らしく”暮らせるように一緒に考える仕事という視点を一言添えます。「介護＝支える人／支えられる人」という線引きを強くないことを心掛けます。**子どもたち自身も、すでに家の中で誰かを支えている存在である**ことを丁寧に伝えます。

小学生向け

家庭科の授業で習う「お手伝い」や「思いやり」と関連づけ、「みんながお家でやっているお手伝いも立派な介護の一部かもしれないね」と、身近な例に置き換えて話します。

例えば「重い荷物を持ってあげる」「おじいちゃんと一緒に散歩する」など、子どもでも理解しやすい行動に結びつけます。

「みんなの“やさしい気持ち”は、実は社会を支える大きな力なんだよ」と価値を伝えます。

中学生向け

介護保険制度や施設の種類などにも触れつつ、「人を支える仕事」「高齢者の気持ちに寄り添う仕事」である点を強調します。

「ただ体を支えるだけでなく心を支えるんだ」という理解が深まるよう、具体的な仕事内容（例：食事や入浴の介助、話し相手になる、行事の企画など）を紹介しましょう。「介護は“寄り添う力”“聞く力”“気づく力”が生かせる仕事。これは皆がすでに少しずつ持っている力」と伝え、自己効力感を育てます。

高校生向け

「高齢化」「認知症」など社会課題にも言及し、介護が社会になぜ必要とされるのかをデータを交えて説明しても良いでしょう。

ただし数字ばかりではなく、介護職の**専門性**（介護福祉士など資格や知識が必要なこと）やキャリアパス（介護福祉士→認定介護福祉士やケアマネジャー等）にも触れ、**専門職の意義を捉えます**。「大変だからこそ信頼される仕事」「人の人生の大切な場面に関わる仕事」という大切な価値の視点を入れます。また、「介護は“成長産業”でもあり、“人でしかできない仕事”でもある」と未来への期待感を強調します。



② エピソード紹介（講義）

講師ご自身の体験談や、実際の介護現場のエピソードを一つ紹介します。これは児童・生徒の心に残り、介護の魅力を伝える大きなポイントです。

例 2

利用者の人生の物語を紹介します。
「昔戦争を生き抜いたおじいさんがいて…」など、高齢者の人生経験の豊かさや、それを支える介護の意義を伝えるエピソードも良いでしょう。

物語性のある話は児童・生徒の印象に残ります。実際、小学生への授業で「麦わらぼうしのおじいさんの話」などが強く心に残ったとの声がありました。

例 1

「以前、介護施設で担当していた利用者さんのお話…」と、**利用者との心温まるエピソード**を語ります。

お年寄りからもらった「ありがとう」の言葉に感動した経験や、利用者の笑顔でこちらも嬉しくなった話などが効果的です。

「介護の仕事をしていて良かったと思えた出来事」として紹介しましょう。

例 3

エピソードの中に「相手から学んだこと」を入れます。

例：「その利用者さんに“人を信じる強さ”を教えてもらった」など、介護が“与えるだけの仕事”ではなく“学び合う仕事”であることを示します。「ありがとうを言われて嬉しかった」だけでなく、「こちらが救われた瞬間」も共有すると深い理解につながります。

③ 参加型アクティビティ（体験・ワーク）

講義の合間に、児童・生徒自身が**体験したり考えたりする活動**を入れます。

ここでは展開例をいくつか紹介します。（*具体的なアイデアは後述「具体的なアクティビティ案」

を参照してください）

介護の本質である「対話」「気づき」「相手の立場に立つ」視点を必ずひとつ盛り込みましょう。

クイズ形式で考えさせる

講義中盤で再度クイズを実施し、児童・生徒に考えさせます。「介護の現場ではどちらが本当でしょう？」と二択クイズを出したり、○×クイズを全員でやったりすると盛り上がります。たとえば「介護ロボットが活躍している？○か×か」→答えと解説、のように進めます。（*参考：事後アンケートでも「**クイズ形式が理解を深めるきっかけになった**」との声がありました）

答え合わせの際に、「正解・不正解」ではなく、“なぜそう思った？”を聞く時間を少し挟みます。それにより、多様な考えがあることを互いに知る良い機会になります。



グループワーク

児童・生徒同士で意見を出し合う活動です。

例えば「もし街で困っているお年寄りを見かけたらどうしますか?」といったシナリオを与え、グループで話し合えます。

小学生なら簡単な内容で全員発表まで誘導しても良いです。

中高生なら少し踏み込んで「介護の仕事の大変なところと素敵なところは何だと思う?」、「介護の大変なところを魅力に変えるためにはどんな工夫が考えられる?」などテーマを与え、数分討議→発表させることで、**他者の意見に触れる機会**にもなります。実際の授業でも「周りの人の意見を聞く



ことで理解や関心が深まった」という指摘があります。

発表の前に「どの意見も正解」「思いやりに大小はない」ことを強調します。中高生の場合、「自分ならどうされたいか?」を考えてもらおうと、介護の本質である“相手の世界に入る”体験ができます。

体験コーナー

可能であれば、介護の一端を**身体で体験する**アクティビティを入れます。

例えば簡易的な高齢者疑似体験（アイマスクをして手引き歩行を体験、一人が目隠し役・もう一人が介助役になる）や、車いすの操作体験（数名に実際に車いすに乗ってもらい、押す体験してもらう）などです。

中学生以上であれば、介護用品（おもり付きベストや関節が曲がりにくくなるサポーター等の高齢者疑似体験セット）が用意できれば装着してもらい高齢者の身体の動きにくさを体感するのも良いでしょう。

参加型の体験は児童・生徒の心に残り、「自分にも介護ができた」という自信や意欲につながります。難しい場合は講師がお手本を見せ、児童・生徒数名に前で体験してもらう形でも構いません。

体験後に必ず「感じたことを一言」共有するミニ振り返りを入れます。

体験して終わりではなく、感情と言葉を結びつけることが学びを深めます。「介護は特別な人だけができる仕事ではない」というメッセージを体験に重ねていきます。



4 最新トピック紹介（講義）

本編の終盤では、介護の未来や魅力的な側面を示すトピックを紹介しましょう。

例えば「介護ロボット・ICTの活用」「介護施設のユニークな取り組み（施設内に駄菓子屋さんがある、夏祭りを開催している等）」を写真付きで紹介すると、子どもたちは驚き興味を示します。（*参考：事後アンケートでも「最新の介護機器（ロボ



ット）に関心が集まった」「老人ホームの中に駄菓子屋があると知って驚いた」という声がありました）

こうした**明るい話題**は介護のイメージアップにつながり、授業後に家庭や友人に話したくなるネタにもなります。

中高生には、介護分野でのイノベーションや今後求められる人材像（例えば「ICTに強い介護職」など）について触れ、「皆さんのような若い世代の力が必要です」と呼びかけると、進路検討の動機づけにもなります。

「介護は“古い仕事”じゃなく、“未来につながる仕事”という視点を必ず入れます。中高生向けに、「ICTに強い介護職」「クリエイティブな介護職」など、新しい介護職像を提示します。最後に「みなさんのような若い感性が、この業界に必要なんです」と未来への期待を伝えましょう。

5 まとめへの橋渡し

本編が終わる頃、授業全体のキーポイントがおおよそ揃っています。本編最後に「今日覚えておいてほしいことが〇つあります」などと**重要ポイントを復唱**し、次の**まとめ**パートでそれを整理する前振りをします。

例えば重要ポイントは講師が示し、「あなたはどれが特に重要だと考える？」と聞くことで、一人一人の考え、捉え方を大切にしたい終わりにします。

「介護は“ありがとうの循環”をつくる仕事」という、心に残る一言を入れて締めます。「誰かを支えた経験は、必ず自分の力になる」と前向きなメッセージで終わらしましょう。



03

まとめ（授業の終わり）の 展開例

ま じめのパートでは、授業内容を簡潔に振り返り、児童・生徒の記憶に残るよう仕上げます。「今日の授業を聞きながら“あ、これお家でもできるかも”と思った瞬間はありましたか？」と問いかけ、

気づきを自分の日常に結びつける声かけをします。ポジティブな言葉で締めるのがポイント。「介護＝大変だけじゃなくて、心があつたまる瞬間がある仕事」という空気感を残すようにします。

内容の復習

「今日は介護の仕事について〇〇や△△をお話しましたね」と、**3つ程度のキーワード**に絞って復習しましょう。

「人を助ける仕事」「高齢者の幸せを支える仕事」「“ありがとう”をもらえる仕事」など、本授業の核心となる点を再確認します。スライドの要点ページ（箇条書きまとめ）を映し、児童・生徒と一緒に声に出して読むようにすると記憶に残りやすくなります。



キーマッセージの 強調

児童・生徒に**一番伝えたいメッセージ**を、この場で改めて強調します。（*詳しくは後述「印象に残るメッセージ」を参照してください）

例えば小学生には「介護は誰かに“ありがとう”と言ってもらえる素敵なお仕事です」、中学生には「介護は誰かの幸福を支える社会にとって大切な仕事です」など、**年齢に応じた言葉**で締めメッセージを伝えます。

最後に「この言葉をぜひ覚えていてくださいね」と声掛けしましょう。

例)

小学生には「みんなの優しさが、まわりの大人たちを元気にします」。

中学生には「誰かに手を差し伸べられる人は、どんな場所でも人に信頼されます」。

高校生には「これからの社会は“思いやりを仕事にできる人”が求められています」。

最後に「今日出会えた皆さんなら、きっと誰かの力になれる」と、可能性を信じる言葉で締めます。



児童・生徒の感想共有

時間に余裕があれば、児童・生徒数人に「今日わかったこと・驚いたこと」を発言してもらいます。

小学生なら「介護の仕事、〇〇が大変だけど楽しそうだと思いました!」等、中高生なら「最初は介護にマイナスイメージがあったけど、話を聞いて興味が湧きました」等の感想が出るかもしれません。講師は笑顔で受け止めて「聞いてくれてありがとう」と伝えましょう。児童・生徒の発言は他の児童・生徒にも刺激となり、学びの定着につながります。

感想に返す言葉は、短くても“その子の気づきを認めるひと言”を意識します。

- 「それ、大事な視点だね!」
- 「そこに気づいたのはすごいよ」

児童・生徒の言葉を次の学びにつなげる役割を意識し、“場をつくる”ファシリテーションをします。

実際の授業でも、児童・生徒同士の感想が他の子の理解を深める好循環が生まれます。



お礼と締め

最後に「今日は皆さん熱心に聞いてくれてありがとうございました」と感謝を伝えます。

小学生には「ぜひおじいちゃんおばあちゃんに優しくしてあげてね」、中高生には「ぜひ今日学んだことを家族や友達にも話してみてください」など、**行動を促す一言**を添えて終了します。

例)

小学生には

「今日学んだ“優しい気持ち”を、ぜひ明日だれかに分けてあげてね」。

中学生には

「今日の話が、皆さんの“誰かを大切にすること”という生き方につながったら嬉しいです」。

高校生には

「介護を仕事にするかどうかは、今決めなくて大丈夫。でも“人を支えることの価値”だけは覚えておいてくださいね」。

最後は講師自身の笑顔で「ありがとう」を伝え、授業を締めくくります。児童・生徒が“自分も誰かの力になれるかも”と思える終わり方を目指します。

04

具体的なアクティビティ案 (ワーク・クイズ・体験など)

授 業中に取り入れられる具体的な活動例を、対象学年別にいくつか紹介します。児童・生徒の発達段階に合わせた**体験型のプログラム**を重視す

ることで、理解が深まり、行動意向の醸成につながります。

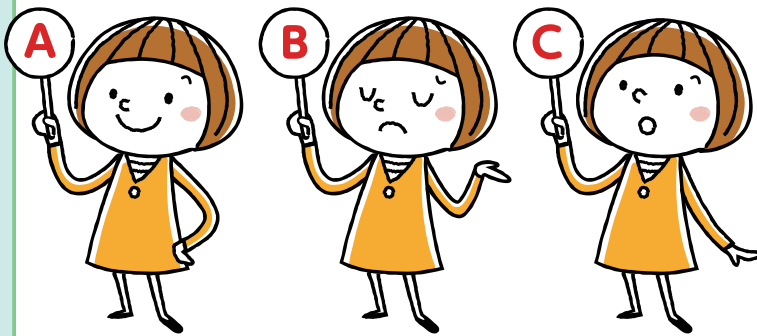
4-1

小学生向け アクティビティ例

クイズ

「高齢者とお話をする」「一緒に歌をうたう」「食事やお風呂のお手伝いをする」。「この中で介護ではないのは？」など、選択型のクイズを児童に挙手で答えさせます。正解発表後、「実は全部介護に入るんだよ」

「体を支えるだけでなく、一緒にお話したり、歌をうたったりすることも大事な仕事なんだよ」などと解説しましょう。クイズはゲーム感覚で参加でき、知識の定着に役立ちます。「みんながお手伝いでやっていることも、実は介護の大事な一部です」とリンクさせましょう。ゲーム感覚で楽しみながら参加でき、成功体験として「自分にもできる」という意識を芽生えさせていきます。



道具あてクイズ (写真資料使用)

介護で使う道具の写真を見せ「これは何に使う道具でしょう？」と当てさせます。

例えば「滑り止めの付いた靴下」「お風呂用のいす」「介護ロボット(セラピーロボット)」等の画像を提示し、用途を考えさせます。

児童から面白い答えが出たら肯定しつつ正解を伝えます。「こんなロボットがいるんだ!」「おじいちゃん家にあるかも!」と盛り上がり、新しい発見になります。

「こんな便利な道具があるんだ!」という発見体験を意識して実施します。子どもが自宅で見たことのある物と結びつけると理解定着しやすくなります。

体験ゲーム(高齢者の気持ちを体験)

簡単な体験ゲームで高齢者の不便さを疑似体験します。

- 例:「箸で豆つかみゲーム」…利き手と反対の手でお箸を使い、小さな豆やビー玉をつかんで別の容器に移す競争をします(手先が思うように動かない高齢者の体験)。
- 例:「見えないって大変!ゲーム」…2人1組で1人が目隠しをし、もう1人が手を引いて教室内を歩く。終わったら感想を言い合う(視覚障害の疑似体験)。

これらは**楽しみながら思いやりを育てる**狙いがあります。

体験後に必ず感想を参加者同士で共有します(「大変だったけど楽しかった」など)。「高齢者の生活が少しわかったね。思いやりってこういうことなんだ」とまとめ、共感を育みます。

ありがとうリレー

紙とペンを配り、「身近なおじいちゃんおばあちゃんに日頃伝えたい“ありがとう”を書いてみよう」とワークをします。

書いたら数人に発表してもらいましょう。「おばあちゃんがいつも美味しいご飯を作ってくれるからありがとう」等、温かい雰囲気になります。講師は「そういう気持ちが介護の仕事につながっていくんだよ」とまとめます。この活動は短時間でできますし、家庭への波及効果も期待できます（書いたカードを持ち帰って実際に渡すよう勧めても良いでしょう）。

「今日感じたありがとうの気持ちは、介護の仕事とつながるよ」とリンクさせます。子どもが小さな「自分にもできること」を実感できるようにします。



4-2

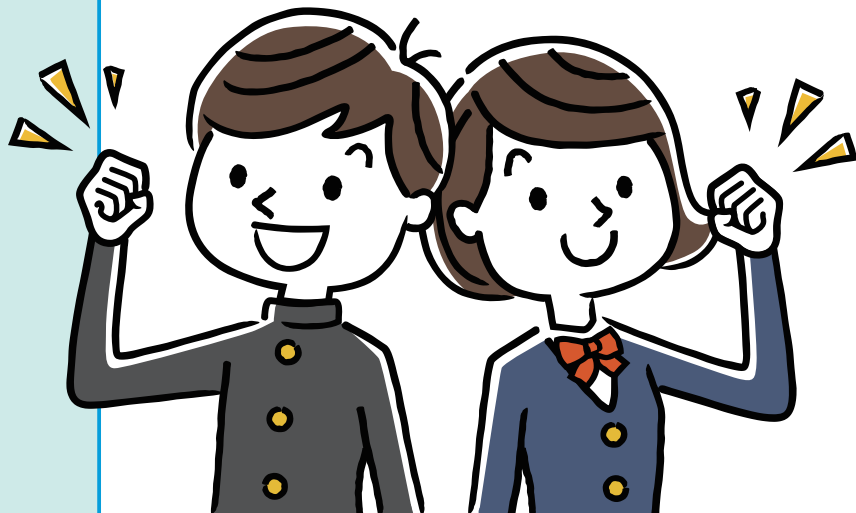
中学生向け アクティビティ例

グループ討論：もし○○だったら？

「もし自分の家族が認知症になったらどう感じる？どう支える？」など、少し踏み込んだテーマを与えグループで3～5分討論してもらいます。発表では各グループから意見を1つずつ紹介してもらいましょう。

「専門職に任せたい」「自分も助けたい」など多様な意見が出ますが、講師は「今日聞いたように介護職は家族を支える心強い味方になります」とフォローし、**介護職の役割**を再確認します。生徒同士の対話で、介護への理解と共感が促進されます。

生徒の意見に正解はないと伝え、共感や思いやりの幅を広げます。「介護職は家族を支える心強い味方になる」という社会的意義を意識させましょう。



職業調べクイズ

介護職に関する職業知識をクイズ形式で出題します。

「介護福祉士になるにはどんな方法があるでしょう？A：専門学校や大学で資格をとる B：誰でもすぐ現場でなれる」など進路に絡めた問題を出すと興味を引けます（正解はAですが、現場経験から資格取得も可能等補足説明）。

他にも「介護福祉士は国家資格である○か×か（正解○）」など、中学生でも知っておきたい職業情報をクイズにします。また、国家資格があるとどのような利点があるのか、意味と価値が理解されるような説明を添えることで、**キャリア教育**の一環として有益となります。

クイズ形式で進路の選択肢に関心を持たせます。「資格取得やキャリアの積み方も自由に考えられる」と前向きな情報を添えます。

介護技術体験

中学生にもなると体格もあり、簡単な介護の技術体験が可能です。

例えば「車いす体験」ではペアになり、一人が介助者、一人が利用者役で教室内を少し移動します。段差の上り下りを体験させると「段差がこんなに怖いなんて!」と気づきがあります。

また、「更衣介助体験」として、ペアで生徒一人が介護職役、もう一人が片腕が不自由な利用者役で、ジャージの上着を着せたり脱がせたりしてみると「相手の気持ちを想像する」など発見があります。

体験を通じて介護スキルの難しさや大切さを感じることができます。

体験の目的を「単に操作を覚える」ではなく、「相手に合わせる大切さ」「支える責任感」を理解させます。感想共有で「やってみて分かったこと」を発言させると学びが深まります。



4-3

高校生向け アクティビティ例



ディベート：「介護職は○○だと思う」

肯定・否定に分かれてミニディベートを行います。

例えば「介護の仕事は誰にでもできる仕事だと思う／思わない」をテーマにし、2チームに分けて討論→それぞれ代表発表。賛否両論出たところで、講師が「確かに誰でも人を思いやる気持ちがあればできます。しかし専門知識や技術も必要で、それを学ばばもっと良いケアができます」とまとめます。

高校生には**批判的思考**を促す活動も有効です。ただし討論が難しそうなら無理に深めず、講師の解説で回収してください。

討論後のまとめで必ず「介護には人を思いやる気持ちが大変ですが、専門知識・技術を学ばばより良いケアができる」というメッセージを強調しましょう。批判的思考の練習として、意見を言い合う楽しさも体験させます。討論が深まらなければ、無理強いせず講師の解説で収束させ、安心感と理解を両立させます。

進路マッピング

高校生の関心に直接訴える活動です。

「もし介護の仕事に就くとしたら、どんな道があるか一緒に調べてみましょう」と全員にスマートフォンで調べてもらったり（事前に学校側OKの場合）、またはグループごとに進路情報カード（介護福祉士になるルート、大学の福祉学部案内、専門学校一覧、介護以外の福祉職種紹介など）を配って読んでもらいます。その上で「〇〇大学には福祉系の学部がある」「介護福祉士は国家資格で専門学校で取れる」など発表してもらい、講師が補足します。

具体的な学びのルート提示は高校生にとって進路を現実的に考える助けとなります。

高校生は「自分の将来」に直結する情報に関心が高いので、具体例や写真・データを示すと効果大です。「将来の自分が介護に関わるかもしれない」という主体的な意識を引き出しましょう。



ケーススタディ

「ある介護現場の一日」のケースを示し、グループで問題点や自分ならどうするかを話し合わせます。

例：「利用者さん同士でケンカが起きてしまった。あなたが介護職ならどう対処する？」など。高校生は抽象思考もできるので、自分なりの答えを考えさせ、最後に講師が実際の現場対応を紹介します。

「プロはこんな風に対応しています」と伝えることで、介護職の**専門性や判断力**に気づかせることができます。現実例を示すことで、介護職の専門性や判断力の高さを体感できます。抽象的思考力と社会的課題への意識を育てましょう。



施設見学の企画

授業中に全て実施はできませんが、「今度ぜひ皆さんに介護施設を見学に来てもらいたいです。行ってみたい人？」と問いかけてみます。

手が挙げれば、「ぜひ先生と相談して機会が作れたら嬉しいです」と伝えてください。**見学やボランティアの提案**は、高校生の具体的な行動につながります。授業後のフォローでも触れますが、その場で声掛けしておくことで意識づけになります。

実際の行動につながる「次の一步」を意識させます。授業後のフォローで再度意識づけすることで、進路やボランティア意欲に結びつきます。

05

使用する教材・資料 (スライド、写真、動画など)

効

果的な授業のために、**視覚教材**を積極的に活用しましょう。(※参考:事後アンケートでも「写

真や映像などの視覚的資料が分かりやすく理解を助けた」という声が多く寄せられています)

スライド(パワーポイント等)

文字は大きく、箇条書きは1枚に3~5点程度に絞ります。専門用語にはふりがなを振るか平易な言い換えを付けます。デザインはシンプルに、**イラストやアイコン**を交えて子どもにも親しみやすくしましょう。色使いも見やすさを意識します(高齢者に関する話なのでお年寄りを揶揄するような派手すぎる演出は避けつつ、明るイトーンで)。

小学生向けスライドにはゆるキャラ風の挿絵を入れる、なども効果的です。

動画

字幕付きの短い動画は理解促進に非常に効果的です。

5分以内で、例えば「介護施設の1日紹介」「介護ロボットのデモンストレーション」「若手介護職員へのインタビュー」など、児童・生徒の興味を引きつつ介護への理解が深まる映像を選びましょう。自治体や厚生労働省、業界団体が制作した動画(Youtubeで「介護 仕事 紹介」などと検索)に適切なものがあります。

事前に内容を確認し、学校の機器で再生できる形式かチェックしてください。当日は「少し映像を見ましょう」といったん話を止めて上映し、終わったら「今の映像で〇〇が映っていましたね」と振り返ると効果的です。

写真

百聞は一見に如かずです。介護現場の写真のできるだけ多く用意しましょう。

例)「介護施設でお年寄りと笑顔で話す介護職員」「車いすで散歩に出かける様子」「デイサービスで一緒に体操している場面」「利用者さんの握った手を職員が包み込んでいる場面」など。**笑顔の写真**は特に大切です。(※参考:アンケートでも「写真で介護を受ける高齢者の笑顔を見せることで、介護職のやりがいを実感できた」という声がありました)

厚生労働省「介護のしごと魅力発信等事業」のポータルサイト等を参考にしてください。(詳しくはP26ご参照ください)(※個人情報に配慮し、実在の利用者が特定される写真はNG。可能であればご自身の施設で許可の得られた写真を使用)。



これからのKAIGO



知る。わかる。介護のしごと



配布資料

基本的に授業中はスライドと口頭説明で十分ですが、中高生向けには**補足資料**を配っても良いでしょう。

例えば介護職の進路ガイドや資格取得ルートを図解したプリント、介護職員初任者研修や介護福祉士資格についての簡単な説明資料などです。高校生には厚労省や自治体のウェブサイト情報をまとめた紙を渡して「興味がある人は後で読んでみてね」と伝えれば、より深い学びを求める児童・生徒に応えられます。

板書

スライド利用時でも、黒板やホワイトボードを併用しましょう。

児童・生徒の意見を書き留めたり、キーワードを書いて強調したりします。特に**重要キーワード**（後述の印象に残るメッセージなど）は板書し、最後まで残しておくのが良いです。授業のまとめで指し示しながら復習できます。

実物教材

可能であれば実際の介護用品を持参しましょう。

たとえば滑り止め付きスプーン、軽量食器、歩行補助杖、折りたたみ式車いす、紙おむつサンプルなど、**触れる教材**があると児童・生徒の目が輝きます。小学生相手ならこれだけで「おおー！」と盛り上がり、中高生でも「初めて見た」「意外と工夫されているんだ」と感心します。ただし持ち運びが困難なものは写真で代用しても構いません。「最新の見守りロボット（ぬいぐるみ型ロボット）を今日は連れてきました！」と実演すれば、それだけで強い印象を残せます。



準備のポイント

機材の準備・動作確認は入念に。プロジェクター、パソコン、スピーカー、マイク等、学校側と事前に打ち合わせておきます。動画再生の場合は音量や再生ソフトの確認、ネットが必要なならオフラインで再生できるようにするなど、トラブルを防ぎましょう。

また、**リハーサル**としてスライドを通して一度声に出して練習し、時間配分を確認すると安心です。

06

講師の話し方や表現の工夫

児 童・生徒にとっては普段接する機会の少ない「介護のプロ」の話です。親しみやすく、かつ熱意の伝わる話し方を心がけましょう。（*参考：

アンケートでも「講師の話し方や熱意が児童・生徒を引き込んだ」「もっと話を聞きたいという意欲につながった」と評価されています）

明るく 元気な声で



声はハキハキと明瞭に、笑顔で話します。

特に小学生相手には明るいトーンでテンション高く、中高生にはフレンドリーかつ少し落ち着いたトーンで語りかけると良いでしょう。緊張すると早口になりがちなので、意識して**ゆっくりめに話す**ことを意識します（子ども相手でも幼児扱いはせず、あくまで一人の聞き手として尊重しつつわかりやすい言葉選びを）。

専門用語は 噛み砕く



例えば「要介護認定」「ADL（日常生活動作）」などの専門用語が必要になる場面では、そのまま使わず平易な説明を添えます。「**要介護**というのは、一人で生活するのが難しくて助けが必要ですよという状態のことです」のように、一度難しい言葉を出してから説明するか、最初から「生活に助けが必要なお年寄り」と言い換えてもOKです。児童・生徒が混乱しないよう常に噛み砕いて、「難しいかな？大丈夫かな？」と表情を見ながら進めます。

ジェスチャー や実演を 交える



口頭だけでなく、ぜひ**身振り手振り**や簡単な実演を交えてください。

車いすの押し方を説明するときは実際に手押しの動作をしてみせる、「ベッドから起こすときは…」と身振りで表現する、など視覚的な工夫をします。

小学生は特にジェスチャーに反応しますし、中高生も実演があると理解しやすくなります。「コミュニケーションが大事」と言うときは笑顔で握手をする真似をしてみせるなど、言葉以外でも伝えましょう。

対話を 大切に



講義中、適度に児童・生徒に問いかけ「そうだね?」「知ってる人いるかな?」と**双方向**に進めます。

児童・生徒の反応に「うんうん、そうなんだね」「それは大変だったね」「いい意見だね!」と合いの手を入れて、**双方向の雰囲気**を作ります。発言してくれた児童・生徒には「ありがとう、教えてくれて」と必ずお礼を伝えましょう。講師の穏やかな受容的態度が安心感を生み、さらに発言しやすい雰囲気になります。

ユーモアと 誉め言葉



時折ユーモアを交え、笑いを誘うのも効果的です。

例えば介護現場の微笑ましい失敗談を話す、一瞬冗談を言う(小学生にはなぞなぞ、中学生には少し皮肉を効かせたジョークなど)で場を和ませます。ただし笑わせようとしすぎないようにバランスに注意です。また、児童・生徒の反応や行動をしっかり褒めること。「おー、車いす押すの上手!」「皆さん真剣に考えてくれました」と認める言葉を多く投げかけると、聞き手の満足度が上がります。

熱意を 伝える



講師自身が**介護の仕事に誇りと情熱**を持っていることを伝えるのが何より重要です。

エピソード紹介の際や最後のメッセージで、「私も最初は不安だったけど、この仕事をしていて本当に良かったと思っています」など**本音の思い**を語りましょう。児童・生徒はそうした熱い思いに心を打たれます。実際、講師の熱意や具体的な体験談が児童・生徒の意識変化に寄与したとの報告があります。

聞き取り やすさ



マスクを着用して話す場合は特に、声がこもらないように注意します(必要に応じてフェイスシールドや透明マスクの検討を)。また教室の後ろまで声が届いているか、話し始めに「声聞こえていますか?」と確認してもOKです。話しながら黒板を指すときなど背中を向けると声が届きにくいので、**できるだけ児童・生徒の方を向いて**話すようにします。

中高生相手では、ときおり**アイコンタクト**をとり、一人ひとりに語り掛ける意識を持つと集中力が持続します。



07

授業後のフォロー（家庭・地域への波及や見学受入れ）

授業が終わった後も、児童・生徒たちの学びと興味を持続・発展させる工夫をしましょう。**事後フォロー**によって、授業の効果が家庭や地域にも

広がり、将来的な介護人材育成や地域福祉の向上につながります。

授業後の情報提供

授業は「ここで終わり」ではなく、子どもたちが介護を“自分ごととして育てていく”ための入口です。だからこそ、授業後のフォローはとても大切にしています。授業中に紹介しきれなかった内容や、もっと知りたいと思った児童・生徒が次の一歩を踏み出せるように、年齢に合った情報を先生経由でお渡しします。

小学生や中学生には、

- 介護や人との思いやりをテーマにした絵本
- 高齢者との関わりをわかりやすく伝える子ども向け動画といった、「日常の中でそっと触れられるもの」を紹介します。

中学生・高校生には、

- 現場で働く介護職のインタビュー記事
- 地域で開催されている介護体験イベント
- 厚生労働省などが発信している介護の啓発サイト※P26をご参照ください

など、進路や社会とのつながりが見える情報を届けます。

アンケートでも「もっと動画で知りたい」「現場

の人の話を聞きたい」という声が多いため、推薦できる公式チャンネルもあわせて紹介しています。ただし、児童・生徒個人へ直接案内せず、必ず担任の先生を通じて共有していただく形にしています。学校と一緒に子どもたちの学びを守りながら、安心してアクセスできる道をつくるためです。

授業は一度きりでも、“心に残る小さなきっかけ”はその後の人生で花開くことがあります。その芽が育つように、授業後のフォローも丁寧に行っていきます。



これからのKAIGO



知る。わかる。介護のしごと



家庭への共有

授業が終わって教室を出たあと、子どもたちが「家で誰に何を話すか」で、介護のイメージは大きく広がっていきます。

授業の最後に小学生へは

「今日の学びを、ぜひおうちの人にも話してみてね」

と伝えていきます。

- 小学生は素直で、すぐに家族へ届けてくれます。「家でおばあちゃんの手伝いをしたよ」「お父さんに“ありがとうの交差”の話をした」そんな声を実際に何度も聞いてきました。

●中学生や高校生には、少し照れもあるので、「きっと家族の人も“へえ〜!”って驚くと思いますよ」と背中を押します。

授業中に伝えた「介護施設に駄菓子屋さんがある」「VRでリハビリをする施設がある」など、話題性のあるトピックは、家庭で会話のきっかけにな

りやすいからです。

家庭に話が届くと、保護者の方も「介護ってこんな世界なんだ」と知ることができ、結果的に地域全体の介護への理解や関心が広がっていきます。この“家庭への広がり”は、出前授業の大きな価値のひとつです。

学校・先生との連携

授業が終わったあと、必ず担当の先生と短くてもお話するとよいでしょう。

「〇〇さんがこんな反応をしていました」

「△△くんは介護の仕事に興味を持っていそうでした」

先生が知りたい児童・生徒の新しい一面を共有する時間でもあります。

その際、可能であれば

学級だよりや学校からの通信に、授業内容を少し紹介してもらえないか

お願いしています。

「今日の出前授業で、子どもたちはこんなことを学びました。ぜひご家庭でも話を聞いてみてください。」

この一文が入るだけで、保護者へ温かく情報が届き、家での会話につながり、子どもたちの学びがもう一段深まるのです。

学校と一緒につくる“地域に広がる学び”。そこに
出前授業の価値が生きてきます。

施設見学・体験の受け入れ

授業を受けた子どもたちの中には、

「実際の介護の現場を見てみたい!」

と目を輝かせて言ってくれる子が必ずいます。

そんな時こそ、**実際の施設見学や体験の機会に**

つなげることが、学びを一步深める絶好のタイミングです。

学校と相談しながら、地元の介護施設への訪問学習を調整していきます。位置づけも学齢によって自然に変えられます。

- 小学生：社会科見学として
 - 中学生：総合学習・キャリア教育の一環として
 - 高校生：進路研究・ボランティア活動として
- 見学先では、ただ歩いて回るだけではなく、**「人と人が関わる介護」の空気を感じてもらうこと**を大切にしています。

例えば

- 高齢者の方と一緒に簡単なゲームを楽しむ
- 歌を一緒に歌ってみる
- 車いすの操作を体験してみる
- 施設で働くスタッフへインタビューしてみる（仕



事の楽しさや大変さを聞く)

こうした体験があると、授業で話した「思いやり」「専門性」「ありがとうの交差」が、目の前の現実としてストンと落ちていきます。

実際、見学後の子どもたちから「もっと知りたくなった」「介護の仕事がかっこよく見えた」という声が多く届きます。

ボランティア活動への誘導

授業をきっかけに、「もっと関わってみたい」と感じてくれる中高生は少なくありません。その思いを、そっと後押しできるように、地域の福祉ボランティアの入り口を提示します。

例えば

- 認知症サポーター養成講座
- 社会福祉協議会主催の高齢者交流イベント
- 夏休みの介護施設ボランティア
- 地域包括支援センターが開催する見守り・地域づくり活動

「もし今日の話聞いて 少しでも心が動いたら、こんな活動もありますよ」と授業の最後に紹介しておく、興味をもった児童・生徒が必ず数人は

まさに、「百聞は一見に如かず」。現場を見た瞬間にしか生まれない“気づき”があります。

もちろん、安全管理は最優先。施設側とも連携しながら無理なく、温かく、児童・生徒を迎えられる環境づくりを進めていきましょう。

子どもたちが初めて介護に触れる入口として、見学体験はとても大切な一歩です。

残って声をかけてくれます。

これまでの出前授業でも、「家の近くのデイサービスでボランティアを始めました」

「将来、福祉の仕事をしてみたいと思った」という報告をくれる児童・生徒がいます。

子どもたちの“やってみたい”という新鮮な気持ちを、次のアクションにつなげられるように、活動先や相談窓口の情報は、必ず先生を通じて伝えるようにしています。

ボランティアは、介護の世界をもっと身近に感じるための、とても大切な第一歩です。

アンケートの実施

もし時間と学校側の許可があれば、授業の最後に 3~5分の簡単なアンケートを実施するのがおすすめです。

アンケートは、児童・生徒たちの心の動きをその場で言語化させ、学びを定着させる効果があります。

そして、講師である私たちにとっても、次の授業をより良くするヒントになります。

質問はシンプルで十分です：

- 今日一番心に残ったことは？
- 家族や友達に話したいと思ったことは？
- 介護の仕事に興味はわいた？

実際、アンケートには児童・生徒の素直な声

がたくさん書かれています。

「介護の仕事がこんなに専門的だとは知らなかった」

「おじいちゃんに優しくしたくなった」

「高齢者と関わるのって意外と楽しそう」

こうした一言ひとことに、こちらが勇気づけられます。

集めたアンケートは、担当の先生とも共有し、学校での今後のキャリア教育にも生かしていただけると、地域全体で子どもを育てている実感につながります。

授業は一度きりでも、その後の気づきや行動が長く続いていくように、アンケートは小さな「振り返りの窓」としてとても大切な時間です。

小学生
向け

「介護は“ありがとう”が循環する仕事」

小学生には“やってみたらわかる喜び”が響きます。
友だちにランドセルを持ってあげた時、落とした消しゴムを拾ってあげた時に返ってきた「ありがとう」の気持ち。その延長線上に介護の仕事があります。「今日みんながだれかに優しくしたら、どこかで“ありがとう”が一つ増える。介護の仕事は、その“ありがとう”を毎日つくるしごとなんだよ。」
こう伝えと、子どもたちは自分の体験と自然につながります。

中学生
向け

「介護は“恩返し”のバトン」

思春期は、自分の役割を意識し始める時期。
家族から受け取ってきた“してもらったこと”を、いつか誰かに返すという視点が響きます。「小さい頃にお世話になった人たちに、今度は自分がバトンを返す番。介護の仕事は、そのお手伝いをする“恩返し”のバトンです。」
抽象と具体のあいだにある“大切にしたい気持ち”を伝えるイメージです。

高校生
向け

「介護は“誰かの幸福の背中を支える仕事”」

高校生は、自分の進路と社会のつながりを考える年代。
“人の人生を支える仕事”という視点が刺さります。「介護は、誰かの“生きたい”を支え、その家族の“安心したい”を支える仕事です。すごく静かだけど、すごく大きい。社会の背中を支えるしごとなんです。」
“静かだけど、すごく大きい”というワードは高校生に深く残ります。

全学年
共通

「思いやりは、今日からできる専門性」

思いやりは“やさしさ”でありながら、
介護のプロにとっては立派な専門能力であることを伝えます。「思いやりは今日からできる“専門性”です。相手の立場に立つこと、困っている人のそばにいること。それが、介護の始まりであり、人生に役立つ力です。」
「専門性」という言葉を入れることで、“ただのやさしさじゃない”ことを伝えられます。

その他 キーワード

「介護は笑顔の連鎖をつくる仕事」

ひとつの笑顔が、周りの家族にまで広がっていきます。

「あなたにも必ずできることがある」

“完璧じゃなくていい。寄り添う一歩がすでにケア”と伝えます。

「ありがとうの交差点」

利用者さんも介護職も、互いに「ありがとう」を贈り合える場所と伝えます。

「介護の誇り」

介護の仕事を選ぶことは、「誇りを持って誰かの人生に寄り添う選択」とビジョンとともに提示します。

「ちいさな思いやりが世界を変える」

介護は特別な人だけの仕事ではなく、「席をゆずる」「声をかける」といった小さな行動から始まることを知ってもらいます。

「ケアは未来への投資」

高齢者の笑顔づくりは、社会の安心感を生み、それが自分たちの未来の暮らしを豊かにすることにつながるという視点です。

中高生に刺さる“社会づくり・未来づくり”のキーワードです。

メッセージを「残す」工夫

授業の最後だけでなく、導入・体験・まとめの各パートに散りばめながら繰り返すことが大切です。

- 黒板やスライドに“今日のキーワード”として大きく書く
- 児童・生徒に声に出して読んでもらう
- ワークの途中で講師自身の経験とリンクさせて話す
- 最後にノートにひと言メモしてもらう

すると、児童・生徒の中に「あ、これ大事なんだな」という小さな灯が残ります。



以上が、介護職の皆さんが小学校・中学校・高校への出張授業を実施する際のマニュアルです。一読いただくだけで、授業の準備から当日の進め方、そして事後フォローまで見通しが持てるよう構成しました。**介護の魅力を次世代に伝える皆さん**

の熱意が、必ずや子どもたちの心に届きます。自信を持って、楽しんで授業に臨んでください。

最後に、「介護はありがとうがあふれる仕事」です。この素敵な事実を、届けられるようにしていきます。

本プロジェクトは令和7年度介護のしごと魅力発信等事業(情報発信事業)として実施しております。(実施主体：朝日新聞社 厚生労働省補助事業)

また、本マニュアルの内容は、令和6年度介護のしごと魅力発信等事業で実施した出張授業のアンケート等をもとに作成しています。

ご参考URL



これからのKAIGO

これからのKAIGO

https://www.asahi.com/ads/korekarano_kaigo/

厚生労働省補助事業「介護のしごと魅力発信等事業」にて作成された多様な働き方、しごとの魅力を伝えるサイトです。



知る。わかる。介護のしごと

知る。わかる。介護のしごと

<https://kaigonoshigoto.jp/>

厚生労働省補助事業「介護のしごと魅力発信等事業」にて作成された二次利用可能なコンテンツ、介護のしごとに関する情報、都道府県等の取り組みを掲載しています。

介護のしごと出張授業マニュアル

実施主体：朝日新聞社・厚生労働省補助事業

令和7年度 介護のしごと魅力発信等事業(情報発信事業)

監修：NPO法人未来をつくるkaigoカフェ 代表 高瀬比左子

協力：東京学芸大学付属竹早小学校主幹教諭 上野敬弘

出張授業の協力：一般社団法人KAiGO PRiDE <https://kaigopride.jp/>

NPO法人未来をつくるkaigoカフェ <https://kaigocafe.com/>

トリニティカレッジ広島医療福祉専門学校 介護福祉士学科 学科長 吉岡 俊昭